登録番号　44

丘の上でみちくさ
～馬が導く 飯田の暮らしと生業のかたち～

飯田の歴史を紐とくと、そこには生業と生活が関わり合ってうまれる中心市街地の賑わいがあった。馬が草を食みながらゆっくりと歩いていく様子が「道草」の言葉の由来。馬とともに、道草をしながらゆっくりとまちを歩くことで見えてくる新しい飯田の結いのかたち。

背景 / 問題意識

かつて中心市街地が活気で満ちていた頃、“道”に車は無く、暮らす人が“道”に溢れていた。商店街での生業と人々の生活が共に関わり合うことで、賑わいがうまれていた。自動車の普及により、道には車が行き交うようになった。城下町であり、丘の上に位置する飯田の商店街は徒歩に適した構造であったが、商店街の中を多くの自動車が通るようになったことで活気を失ってしまった。信州一の商都と呼ばれていた飯田から、商店街の力が消えたとで、まちのにぎわいもどんどん失われてしまっている。

目標

中心市街地に、商店街の生業と生活が関わり合う中で街が賑わう、かつての風景を取り戻したい。

提案

飯田において歴史的に重要な役割を担って来た馬を用いて、飯田の道のあり方を再編集し、人と商店街、人と道、人と人の関係を結い直すデザインをすることによって、中心市街地にもう一度賑わいを呼び戻す。

商店街を歩馬専用道とすることで人と商店街をつなぐ

飯田市街地の二つの商店街である中央通りと知久町通りを車が通らない道として整備する。中心市街地において活力の源であった二地区商店街に、本来あるべき多くの人が歩き回る風景が復活する。

裏界線に馬が日常を運ぶことで人と道をつなぐ

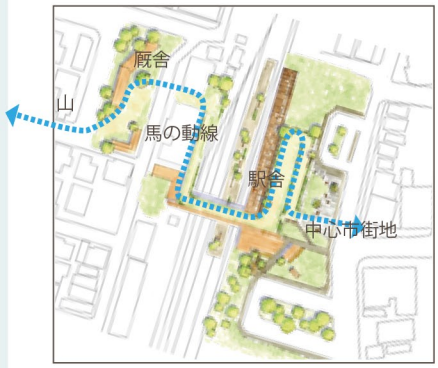
飯田市街地の家の裏にはり巡らされる裏界線を、馬が商品を売り歩いたり、ゴミを回収したりするための場所としてデザインすることで、人々が生活と道の関係が強くなる。

道でつながる馬と人の拠点を作ることで人と人をつなぐ

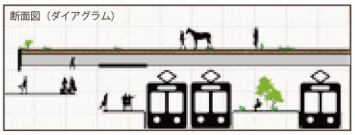
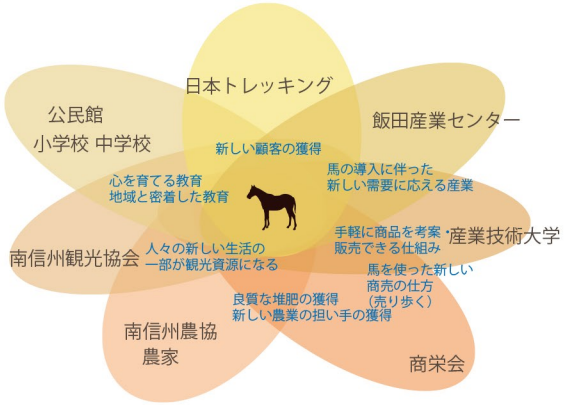
馬の休憩場所兼人の活動拠点として古い蔵や空き地を利用する。一階では馬と触れ合うことが出来る他、普段関わることのない人同士が関わり、新しいものを生み出していく拠点となる。

飯田駅舎・駅広場

馬道、馬界線、馬の駅の全ての機能を併せ持つ
駅舎と駅前空間で新しい飯田を象徴する



新しい飯田市中心市街地の顔となる駅舎からは毎朝屋根の上を通って馬が街へ出て来て、人々の生活や生業に直接関わりを持つ。待ち時間の長い飯田駅では、待ち時間を楽しむための仕掛けがいくつも仕掛けられている。



馬が飯田を結い直す